

第2回 新宿区文化芸術振興会議（第2期） 議事要旨

■開催日時 平成24年12月18日 午後1時から午後3時まで

■開催場所 新宿区役所本庁舎5階 新宿区議会大会議室

■出席者

委 員 高階秀爾 垣内恵美子 今沢章信 大津司 乗松好美 大野順二
原口秀夫 大和滋 舟橋香樹
(欠席 星山晋也 佐藤清親) *敬称略

事務局等 加賀美地域文化部長 橋本文化観光課長 小滝文化観光主査
楠原主任 香取主事
藤牧新宿未来創造財団事務局長 鯨井新宿未来創造財団主幹

■議事の進行

1 開会

- (1) 会議開催に先立ち、事務局から会場の設備について説明があった。
- (2) 高階会長が文化芸術振興会議の開会を宣言し、開会した。
- (3) 高階会長から、前回会議の振り返りがあり、本日の主要な議事は、「第2期新宿区文化芸術振興会議のテーマ設定(案)」について議論することが示された。
また、本日の進行について、次第に沿って進行すること及び審議を効率的に進めるため、次第の議事(1)から(2)までを一括して審議することを確認した。
- (4) 11月に開催された専門部会で、新宿区文化芸術振興会議規則第6条第3項に基づき、委員の互選により、垣内委員が部会長として選出されたことが確認された。

2 議事(要旨)

- (1) 前回会議内容の確認について
議事概要、議事要旨に基づき、前回会議(10月18日)の内容の確認を行い、資料のとおり承認を受けた。
- (2) 第2期新宿区文化芸術振興会議のテーマ設定(案)について
資料2-1及び2-2に基づき、第2期委員による独自のテーマ設定(案)について、垣内専門部会長が説明を行い、資料の詳細は事務局が説明を行った。
- (3) 意見交換を踏まえ、第2期会議の独自テーマとして、「新宿文化センターの今後のあり方と運営方針」について調査審議することが決定された。

3 意見交換

- 文化センターのあり方や、今後の運営方針についての議論が前期、第1期会議ではあまりできなかった。
- それぞれの現状はあるが、第1期からの課題であるネットワーク、マネジメント、専門性という3点を担える機関として、文化センターが抱える課題を整理していけば、地域の中で文化芸術振興の中心的な組織になっていくのではないかな。
- やはりホールというのは、ハード面と実演芸術分野とがかなり関係性をもっている。ハードの仕様を考慮してつくられたソフト（公演）が、きちんと専門性を発揮できるような方向で検討することが求められる。
- 文化センターを「音楽の殿堂」として捉えたときに、どういう範囲でどのように考えていくかということがこれからの議論である。企画の質の高さの問題もあるが、一番大事なことは、「音楽」という専門性を持つことによって、地域の文化、音楽活動、あるいは教育面での音楽のアシストやコーディネートづくりなど、そういうことまで突っ込んでやれるような環境をつくっていくことだと思う。
- 今後ともハード面を考慮しながらネットワークや専門性を強化していくために、どういうソフトを企画していけばよいのか。
- 特に音楽ホールとしてソフト面を考える場合には、どういう形で整備していくか、専門性を持つ職員の配置など具体的な課題もいずれ出てくる。
- 専門部会では、文化センターという名称が音楽ホールには向かないのではないかなという話が一部あったが、すでに定着している名称なので文化センターという名称で構わないと思う。
- 前回会議で、敬老の日のコンサートなどが必要なのではないかと発言した。2月3日に「60代からクラシック！ クラシック音楽の“はじめの一歩”」（日本フィルハーモニー交響楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、東京交響楽団の合同開催）という新しい取り組みが実現することになった。
- 一方で、子どもたちへの教育は絶対欠かせないものである。文化センターを利用しながら、しっかりした演奏会形式の音楽教室を立ち上げていければよい。
- 11月19日の専門部会での主な意見として、音楽ホールとして新宿文化センターは、ハードとして大変良いという意見があった。今後もきちんとメンテナンスして、文化センターをうまく使っていく。また、区民の方にも音楽の場として文化センターを使ってもらい、今後、本格的な音楽を提供していく。さらには、ブランド力や知名度を高めるための公演、たとえば国際的にすぐれた演奏家を呼んだ公演を行うなどが考えられる。
- 著名な演奏家を招聘して公演を行うことは、可能だと思う。
- 文化センターはキャパシティも十分にある。以前の改修時に、客席も広めの椅子になり、ホールとしてのイメージも以前と随分違っている感じがあるので、音楽ホールとして十分活用できると思う。
- パイプオルガンは使う人が少ないかもしれないが、サントリーホールでもうまく活用している。しかし、文化センターではそこまでする必要があるのかな。
- パイプオルガンは一本一本手づくりであり、置く場所に合ったサイズのものをつくるので、一度設置されたパイプオルガンを別のところへ持っていくというのは、まず考えにくい。
- ヨーロッパでは教会にパイプオルガンがあるが、日本の場合は、音楽ホールにパイプオルガンが設置される形態が多い。
- サントリーホールでの活用方法は、昼の時間帯の無料開放や、オルガンだけの30分コンサート

などの取り組みである。

- ・サントリーホール設立の計画時に、ヘルベルト・フォン・カラヤンがパイプオルガンの必要性を主張していたようである。
- ・文化センターは音楽専用ホールであるという位置づけにするのであれば、パイプオルガンはあったほうがよい。
- ・オーケストラとパイプオルガンとで共演する機会もあるので、そうした演出上の幅が広がるのではないか。
- ・新宿文化センターに関しては、音楽や演劇、舞台、そのほかさまざまな文化芸術の発信の場としての重要性がある
- ・実際に一般の利用者が文化センターを利用するためには、さまざまな設備や施設なども必要である。
- ・たとえば外国では、鑑賞後に利用できるように、遅くまでレストランやカフェが開いている。
- ・地域全体としてのいろいろな文化的な楽しみや、社交の場、人々の集いの場所のようなところもあったほうが良い。
- ・現在、新宿区の文化芸術振興に関する施策は、新宿未来創造財団が多くの施設の管理運営を担っている。
- ・文化センターや歴史博物館などは新宿区の文化振興に非常に重要な施設であるため、新宿区の文化芸術に関する方針を踏まえて、文化施設の経営方針、運営ビジョンをリードすることのできる体制を整えたほうが良い。
- ・たとえば東京芸術劇場は、文化芸術に関わりが深い実業家が歴代の館長を務めている。現館長は、福地茂雄氏（企業メセナ協議会理事長、アサヒビール株式会社相談役）である。
- ・平成21年からは野田秀樹氏が芸術監督に就任している。
- ・こうした体制を文化センターでも検討してみることはできないのか。
- ・野田氏の就任当時の発言の中に、「芸術監督に就任したときに、芸術劇場は貸し劇場としての比率が非常に高く、色としては大ざっぱな色だったと感じた。まずは人を呼んで、にぎわいの色をつけたい。」とあった。また、今のビジョンとしては、「若い劇団の育成、子ども向けの演劇教育の事業、そして、すぐれた海外作品の招聘や、すぐれた自主製作作品の発信、さらに、劇場がワークショップを主催して、それを積み重ねていって、ひとつの作品をつくりたい。また、時間がかかるかもしれないが、劇場が役者や劇団を抱えてレパートリー制で公演を打つということが、最終的な理想である。」と発言している。
- ・新宿文化センターの今後のあり方を考えるときに、少し広い発想と、それを実行できる力というものが必要なのではないか。
- ・新宿文化センターに人が集まるようになって、たとえば外からも人がたくさん来る、区内の子どもたちがたくさん来るということになれば、文化センターで新宿のまちの歴史などを紹介することなどもできるのではないか。
- ・これまでも歴史的な情報収集を進めてきているところだと思うが、それらをどのように整備して、紹介していくのかを、もう少し考えてもいいのかという気がする。
- ・新宿のアーカイブをどのようにつくっていく、あるいは、どう残し、どのように活用していくのか。新宿歴史博物館でも、図書館でもよいが、アーカイブセンターのようなものがあればよい。
- ・たとえばスイスのパウル・クレー・センターにアーカイブセンターのようなものがあるが、新宿でも訪問した人が楽しみながら新宿区について、あるいは、その時代について勉強ができるような、人と人とのコミュニケーションがどんどん膨らんでいくような施設があると良いのではない

か。

- 28項目の提言にもあった、マネジメント、コーディネート等の役割も含め、文化施設の経営形態をどうするかを考えることは大事なことである。
- 経営形態については、たとえば館長をどうするか、芸術監督のような人を採用したほうがよいのか、また、フランチャイズ化のような余地を考えられるのか、いろいろな方向性がある。
- 東京芸術劇場の野田氏が言うように、劇場を単に貸し会場ではなくて、将来的には劇場が劇団を持って公演を企画する。それは確かに発信力を高めるし、人々の文化への情熱を集中させる効果があると思うので、この会議の中でも考えていきたい。
- いろいろと区長に注文をつけることは大変であるが、実現してほしいこと、すぐでなくても、検討してほしいことなどは伝えていきたい。
- 新宿文化センターの周囲に人々が集まってくれば、まちのにぎわいが生まれ、文化の継承の場にもなる。
- 別々に文化の継承の場があるのではなくて、文化芸術の拠点として、人々の集いができ、輪ができ、芸術を鑑賞し、同時に新宿の歴史やまちの魅力に触れられるという場をつくっていけるようになれば、かなり壮大なアーカイブになると思う。
- 28項目の提言の進捗がどのような状況になっているのかを確認し、それらに対してアドバイスをするのが、この会議の大きな仕事の1つであると最初に確認した。
- この2期に関しては、28項目の提言から抽出された重点項目と文化センターの2つのテーマをメインに議論することが専門部会から提案され、それらに対してこの会議としての方向性を決めるということを理解した。
- 会議の当初は、28項目の取組状況の確認をやろうと前回会議で決定しているのに、本日の会議では新宿文化センターについて焦点が絞られ、その件は話が違うのではないかと若干の違和感があったが、具体的な案件を、各委員の持つノウハウを集中して取り組むことはとてもいいことなのではないかと思い至った。
- 28項目の提言から絞られた重点項目について、きちんと方向性を定めて、アイデアも出し、討論していく。さらには、その中で極めて具体的に「新宿文化センター」という1つの項目を取り上げて、一般論ではなくて具体的に議論していくことは、会議として非常に良い進め方だと思う。
- 個人的には文化センターに行ったことがないため、音楽活動に携わり、日頃から文化センターを利用し、音楽に関しての専門的なバックグラウンドがある方のほうが、適切な、あるいは的確なコメントができるのではないかと考えている。
- 文化センターを音楽ホールとして、「音楽」を主力に持っていこうということであれば、やはりその方面の専門性が高い方の意見を十分に検討する必要がある。
- 施設の老朽化、パイプオルガンの扱い等、問題を個別化すると、具体的な話が出てくるが、実はこれが大切なことである。
- 具体的な話にステージが至らないと、一般的な議論で終わってしまう可能性があるので、この調査審議事項はとても適切であると思う。
- 文化芸術の重要性やその振興に関する課題について、行政もこの会議も具体的にどうするかを考えなければならない。実際に区としてどういうことをするのか、しっかりと検討していただきたい。
- 現在、文化センターの存在は必ずしも一般の方に、知られているわけではないし、利用されているわけではない。だからこそ、文化センターを生かすような方策を考える必要がある。
- 設備のメンテナンス、フランチャイズ化などについて、しっかりと整理し、それをこの会議で検

討して、区に申し上げていくということが実際に大事なことである。

- 先ほどの東京芸術劇場の話に関連して、先日の東京芸術劇場のリニューアルは、施設として子どもたちや体の不自由な方や高齢者の方を意識した、とても使い勝手がいい建物になり、内装もシックで非常にいいリニューアルを迎えられたなと感じている。
- 特にパッと見て危なかった、真ん中を突き抜けたようなエスカレーターが以前はあったが、安全面を考慮し、再設計されたようである。
- 文化センターも27年度改修を迎えるにあたっては、芸術監督のような方も取り込んで、全体的なことを意識したプロデュースや、リニューアルの計画をしていただきたい。
- 「文化センター」イコール「音楽ホール」という位置づけは、十分に承知している。
- 子どもたちが学校行事として文化センターを利用する機会は、小学校の6年間で1回から2回である。
- たとえば、小学校5年生に対しての演劇教室である。1, 800人も入るホールで一斉に実施するので、非常に乱暴なかんじがする。これは子どもたちに対する企画として、やり方が適していないし、また演じる側にとっても、運動場みたいなイメージで非常にやりづらい中で実施してきているように思う。
- 今回、文化センターを音楽ホールとするならば、演劇教室などの子どもたちに対する事業は、四谷区民ホールやほかのホールに設定し直していくことが求められる。
- 子どもたちが利用する、あるいは鑑賞する視点を持って、よりいい形になるような変更も一緒に考えていかなければならない。
- また、区立幼稚園の観劇会の取り組みに関しても、文化センターで一気に全員に見せるのは適切ではなく、もう二度と、あの演劇や音楽なんかに行きたくないというトラウマのような意識を植え付けかねない。
- 子どもたちにとって観劇会などの事業を企画・設定することは非常に大切であるので、こうした取り組みは区民ホールを活用し、文化センターの大ホールは音楽ホールの方向性で活用していくなどの区別をしたほうがよい。
- フランチャイズ方式を取り入れることで、より身近なところでアウトリーチなどが可能になる。
- 夏休みや春休みなどの長期の休みのときに子どもたちに文化センターを開放することで、子どもたちがより使いやすくなるのではないかな。
- きちんとビジョンを定めて計画を進めていくことによって、子どもたちの可能性がよいほうに広がるのではないかと期待している。
- 可児市文化創造センターの館長に衛紀生氏が就任しており、芸術監督としても活動していて、発信力が強い。
- 可児市民の方が年に何回もセンターに足を運ぶと聞いているし、それはとても素晴らしいことである。
- ギャラリーには作品が展示されており、チケットを持っていない方も、散歩がてらにふらっと立ち寄れるような空間づくりをしていると聞いている。また、誕生日の方には、館長からメッセージカードが届くなど、友の会を積極的に活用しており、ソフト面が本当にきめ細かく充実している。
- 新宿でもそのような取り組みが可能なのではないか。
- 新宿文化センターは、いろいろな方がふらっと立ち寄るという感じではないし、なんとなく暗いイメージがあるので、その辺の改善がされていくことが求められているのではないかな。
- 学校現場では、子どもたちに文化を届ける場合は、なかなかダイレクトに届くことはなく、間に

コーディネートをする人が必要である。

- コーディネーターの養成や、ノウハウをしっかりと蓄積して、アーカイブセンターなどの発信する拠点がきちんと見える形になっていくと、「まずはそのセンターに問い合わせる」という形をつくっていくこともできるのかと思う。
- 教育現場としての関わり方は、もちろん新宿文化センターの使い方と同時に、28項目の中のコーディネートやマネジメントにもかかわってくる。
- たしかに、新宿文化センターには、チケットを持たない人がふらっと立ち寄らないのかもしれない。誰もが気軽に行けるような場所にしたい。
- 子どもたちに文化を伝える場合に、文化センターだけではなくて、区民ホールも使えるかどうかもう一緒になって考えた方がよく、十分に専門的なノウハウを持ったコーディネーターが求められているのかもしれない。
- 文化センターの使い方では、たとえばロビーには美術作品がいくつか並んでいるので、そのようなギャラリーのような場所も何かに使えないか。
- たまたまその美術作品を並べているのではなく、それらをうまく全体としてコーディネートして、総合的に施設を活用していく。みんながふらっと立ち寄れるような施設となって、それが文化の中心になればよい。
- 施設の老朽化という問題に関しては、まず、バリアフリーの視点で言えば、たとえば1階のトイレが地下にあったり、2階に上がるのにわざわざ表のエレベーターを使ったりしなければならないことなどが指摘できる。
- ほかに、親子室がないなど、そのような面で、ほかのホールに比べると、少し足りないものがあると思われる。
- パイプオルガンについては、吹奏楽とパイプオルガンとの共演などの取り組みを行っている。オルガン奏者の話では、文化センターのオルガンはフランス製のとても立派なものであり、決してサントリーホールや帝国劇場のパイプオルガンに劣るものではないとのことである。
- パイプの数もストップという音色を変える部分も大変よいものと聞いている。
- 個人的には、やはり残していただきたいという気持ちがあるし、「新宿文化センター」イコール「パイプオルガン」というイメージがあるので、今後もこれをぜひ活用してほしい。
- 利用料金は決して高い金額ではないので、あとは奏者の問題だけではないか。
- 文化センター開館30周年のときに、作曲家に頼んで、パイプオルガンと吹奏楽の曲をつくってもらい演奏した。確かになかなか披露する機会はないが、そうした取り組みのように、今後もなにか考えてみてはよいのではないか。
- 新宿文化センターは、今後、音楽ホールとして活用していくということで、広く一般の皆さんに来ていただくことが大事である。
- たとえば「音楽・コーラスの集い」、新宿区内の中学校や大学などを中心にした「新宿ユース・プラスフェスティバル」、新宿合唱連盟の「合唱祭」など、区民をはじめとして、長年続いている行事がたくさんある。
- 文化センターは、既存行事に参加している人たちが活用している施設でもある。今後も長くこのような行事を続けていってほしい。
- 文化センターは音楽ホールとしては確かに良いが、練習所という意味では足りない部分がある。ステージ下のリハーサル室は、ホールの公演中は音漏れがするということで使用できない。また、展示室を練習場として使っているが、もとが展示室のため、音が響くので、音楽の練習場ではない気がする。

- 練習場としての活用の面が改善されるかどうかかわからないが、現在は練習の場としてはあまり適していない。
- パイプオルガンは、できれば今後も生かしていきたい。費用はまた別として、知名度のある作者や演奏家を呼んで、ブランド力を上げる企画などが考えられる。
- 文化センターは一般の区民の参加の場としても利用されている。コーラスグループや学校の子どもたちなどが既存行事で利用されているとの紹介があったが、そのような面も生かしていく、それを特徴としていくことも大事である。
- 美術館との協力もおもしろい。文化センターに行って、たまたまロビーに素晴らしい絵が並んでいたら、今度は美術館にも行ってみようかとなるかもしれない。
- バリアフリーという視点では、今、どこの施設も設立から50年以上、半世紀以上たっていることが多い。たとえば、新たにエレベーターをつけるなどは非常に必要なことだが、各面での改善も含めて考えなければいけない。
- 今回の専門部会で新宿文化センターを中心にして議論を進めていくという案には、賛成である。
- 文化センターは、最近では神楽のような催しの会場にもなっている。今年の1月に非常に話題になった「ひろしま安芸高田神楽」や、毎年1月の「新春名作狂言の会」も恒例になっている。
- 一方で、やはり文化センターの本来の役割は、きちんとした音楽の殿堂としての位置づけであると思う。そういう意味では、墨田区の「すみだトリフォニーホール」などのようなフランチャイズ制の検討も必要になってくる。
- ただ漫然と、いいホールだから音楽会をやるのではなく、きちんとしたところと契約をして活動してもらうことで、非常に広範囲なメニューが実現できるようになる。
- どこの楽団とどのような契約をすれば、子どもたちも含めての音楽の殿堂になるのか、みんなが音楽に対して関心を深めていく拠点となるのかをしっかりと検討し、文化センターをもっとレベルの高い音楽センターにしていきたい。
- 利用者の立場からの意見としては、新宿区全体として、リハーサルをする場が少ない。
- ホールを確保するのが大変で、文化センターはいつ申し込んでも無理だという話も聞いている。新宿は各地に地域センターがあって、そこにも練習の場があるが、それを全部申し込んでも、なかなか間に合わない現状があるようである。
- 新宿区は音楽関係の利用者が非常に多いと思われるが、それに対して、利用の場、リハーサルの場が少ないので、文化センターだけではなく、区全体として検討してもらいたい。
- 日本でも最近見られるようになったが、いわば大人の社交の場として美術館や博物館を夜間に利用するようになってきている。これは文化センターのあり方としてひとつ考えてもいいことだと思う。
- 文化センターは、非常に立地もよく、JRの駅からだけではなくて、最近、地下鉄の駅がすぐそばにでき、さらに利用しやすくなった。
- 夜は大人のいろいろな交流の場、パーティの場として活用してみてもどうか。1階のロビーは広いので、グランドピアノでも置けば、よい雰囲気の間ができるように思うし、壁面を利用して絵画も置けば、音楽と絵画との連動した場を創造することもできるのではないか。
- 伝統芸能などに関しての子どもたちに対する対応が気になっている。
- 早稲田大学の演劇博物館で子ども向けの体験講座を実施した。外国語を使う子どもも対象だったため、英語、中国語、ハングル語の通訳も手配しての実施だった。
- 本当は新宿の子どもたちが対象で、新宿区の全小・中学校にPRしたが、参加者25～26名の中で、残念ながら、半分ぐらいは新宿区以外の参加であった。もっと都内の方の関心が高くなる

ような方策がやはり必要なのではないか。

- 埼玉県からの参加者は「どのようにしてこの講座に参加したのか」との質問に、「インターネットで早稲田大学の演劇博物館を見ていて、子ども向けの非常にいい伝統芸能講座があるということで参加した」と言っていた。
- 演劇にも絵画にも音楽にも全部関係することであるが、やはりホール、劇場、舞台に来てくれるのを待っているというだけではなく、いわゆる出前講座のようなものが必要である。
- たとえば、千葉県の美術館が実際に小・中・高校生に出前講座をやっており、子どもたちが美術館に来る前に、必ず1回出向いて行って、レクチャーをしている。
- ただ美術館や音楽ホールに行くというだけではなくて、出張講座として学校に来てもらうことによって、言うなれば事前学習をして、見たり聞いたりするので、子どもたちへの浸透力が違うと思う。
- こうした活動は音楽や絵画の分野では始まっているが、演劇についてもこのような取り組みを実施したら良い。
- 演劇博物館での体験講座では、初めての子どもでも非常に関心を持っていた。特に狂言はわかりやすいし、学校でも教えているので、「授業で教わった柿山伏の話を先生が実際にやっている」と、子どもたちは非常に感激していた。
- これまでの意見を聞いていて、施設という意味では、文化センターは音楽分野に特化して役割分担をしていく施設であるということによいのだろうと思った。
- そのことを考えると、新宿区内外をみて、新宿文化センターは音楽ホールとしては良いが、ハードの仕様は、やはりサントリーホールなどの専門の音楽ホールとはまた少し違うため、その問題を考慮して全体的に考えなければならない。
- フランチャイズというと、100日間ぐらい、そのホールで練習したり本番で演奏したりする構造になっているが、果たしてプロのオーケストラが文化センターでそういうことができるのかどうかという問題も1つある。
- 新宿という土地柄で、「音楽」の内容をどう考えたらよいか。クラシックだけでいいのか、あるいは土地柄から考えたらジャズやポピュラーも含めて、音楽の殿堂としての広げ方をするのか。そういうビジョンのようなものが必要である。
- 最近の議論では、フランチャイズという言葉は、劇場法の間接関係もありますが、文化的な面で使うのをやめようかという話が出てきている。
- どちらかというと、フランチャイズとは商業圏で使用されている言葉なので、文化的な面では適さないように思う。文化面でいうフランチャイズは「本拠地」であり、施設に本拠を置く劇団・芸術集団など、そういう意味で使われている。
- 新宿を本拠地とすれば、出張教室などの取り組みがやりやすくなり、本拠を新宿に置く団体が文化センターや新宿区とその地域での協力関係を持つような、そういう発想に立って、活動を進めていく可能性もあり得るのではないか。
- 現在、芸団協が新宿区から旧淀橋第三小学校を芸能花伝舎として借り受けて、教室や体育館を稽古場に貸し出しているが、仕様上、主に演劇やダンスが中心となっている。
- 音楽をやると音漏れが問題となり、防音措置などにお金がかかる。それこそ新宿区はもう1校ぐらい廃校があれば、そこを改修して、音楽用の稽古場をどこかにつくるなどがあってもよいかもしれない。
- 廃校利用とは言わないが、そういう空きスペースを利用する、それこそ文化センターの分室・分館のようなものをつくるのか、そこまで発想を広げるとよいのかもしれない。

- 演劇に貸し出す施設は芸能花伝舎やほかにもいくつかあるが、音楽の分野では多くはないのかもしれない。
- 文化センターはなるべく音楽に特化していくとしても、本当は音楽だけではなくて、神楽のような伝統芸能も良い。伝統芸能はもちろん音楽でもあるし、パフォーマンスでもあるし、同時に演劇でもあり、つまりは芸能であって、そういうことにも文化センターはうまく使えるかどうか。
- ギャラリーとしての場所をどのように活用するのか。
- ロビーは展示場としても十分に使いそうな気がする。保管環境の問題があるし、展示できる作品も限られるかもしれないが、可能性として広がりを持った文化センターになり得るかもしれない。
- 新宿文化センターは、たしか年間利用者数が50万人近くあったと思う。これは、たとえば新国立劇場の倍ぐらい利用者である。
- 先ほど話題に挙がった可児市の施設とは比べものにならないほどの利用者がいるが、大都会東京の中心部にあるということで、どうしても顔がはっきり見えない、輪郭がはっきりしない面があるように感じられる。
- 新宿文化センターのロケーションがメリットでもあり、デメリットでもあるように思う。新宿だからこそ、全国でも突出した利用者数を誇ることになる一方で、それだけ使われていても、なかなかはっきりしたイメージがない。そのために、いろいろな用途に使われてしまうのではないか。
- 文化センターは、音楽の殿堂として、設立時の技術の粋を集めてつくられた、しかも今なお、音響的には特にそんなに大きな遜色はない施設であるということなので、その強みをうまく生かすような形で、ブランド力を高めていくという方向性があり得るのではないか。
- この会議でも、文化センターに関して調査審議を進めることにおよそ賛同を得たのではないか。
- やはり選択と集中を考え、ある程度はマーケットのニーズなども加味しながら、また世の中の動きも加味しながら、あり方を検討していくことが必要である。
- 新宿区は文化センター以外にも地域センターとして、地域に大小の施設があるので、それらと競合せずに、文化センターでなければならないものに集中していくというあり方があっていいだろう。
- 劇場は、施設のメンテナンスに物すごくお金がかかる。文化センターほどの規模の劇場では、光熱水費だけで数千万円かかり、ほかにも管理運営に関する費用等が、月単位で必要となる。
- ミュージアムの場合は、コレクションに非常にお金をかけていると思うが、劇場ではメンテナンスにとってもお金がかかっていると思う。
- もしこのテーマ設定で決定するのならば、後ほど事務局から資料を提供してもらい、金額などの具体的な数字も考慮した上で、文化センターのあり方を考えていく。
- 委員の中にも文化センターを利用したことがない方もいるようなので、バックステージも含めて、一度、全員でフィールドに出て、かつ、可能であれば、何か代表的な事業を視察することを提案したい。
- 実際に見ることで、文化センターのあり方についての議論のイメージが膨らむと思う。
- グループを分けてもいいと思うが、情報を共有した上で、このセンターをどのように動かしていけそうなのか考えていけたらよい。
- 個人の感触では、一昔前は、劇場は劇場、ミュージアムはミュージアム、また公民館は公民館、という考え方だったと思う。
- 最近では、知的なインフラとして、たとえばミュージアム・ライブラリー団体間の連携が見られるようになった。たとえば、国立新美術館ではよくロビーコンサートを開催している。
- 劇場とミュージアムとのコラボ、アーカイブとのコラボなどの兆しが出てきているので、いろい

ろな広がりがあり得るのではないか。

- ソフトの活動として、どんなことができるのかを想定するのかによって、また、劇場のハードの修繕のあり方や使い方を検討し、逆に使い方に沿ったハード面の整備ということもあり得るのではないか。
- 新宿未来創造財団は指定管理や事業等、一生懸命やっていると思う。これからまた強化していかなくてはいけないと思うが、今までの経緯からいっても、これからのいろいろな状況からいっても、急にこの財団が自主事業をできるようになるかという、それはなかなか難しい。
- フランチャイズという言葉がいいのかどうかは別として、ノウハウがある芸術団体と連携することがよいだろう。
- フランチャイズ契約と言われているものでも、どこまでの活動をやるのかというのは、それぞれ個別の契約内容で決まってくる。
- この新宿文化センターがどういうビジョンを設けて、その実現に向けてどのように進むのかによって、芸術団体とのかかわりを追加していくという、柔軟な対応も十分にできるだろう。
- コンテンツをつくる団体が、ある程度関与してくると、アウトリーチも含めて、いろいろな展開ができる。
- 芸術団体と連携することで、この財団の今の役割をさらに補完して、補強して、さらにはシナジー効果も得られるのではないか。ネットワークという部分にもかかってくるので、次世代団体との連携も当然視野に入れたほうがいいのではないか。
- 事業や活動内容を一般の区民中心に知らせるという広報活動も非常に重要であり、これは文化センターのみならず、文化芸術関係に全体として言えることである。
- 施設の整備、管理、メンテナンスに非常に費用がかかる。
- 専門スタッフ、場合によっては芸術監督、それぞれコーディネートに関する専門家、さらには広報活動やアウトリーチまでを行うことができる専門スタッフ等、スタッフを充実させるにはお金がかかる。
- 外国の美術館では、学校やそのほかの地方との活動等、対外的な活動のための部門があり、専門スタッフが配置されている。また、特別展をやるのであれば、常勤の学芸員とは別に、特別展のための専門スタッフがいる。特に外国との交渉のためのスタッフなど非常に充実したスタッフがいる。
- いろいろと理想を頭で考えていくと、区に対して多くの注文が出てくる。
- 早速にも施設は整備しなければいけないし、すぐには言わないが、専門スタッフ等の配置も整備等、できる部分からやっていただきたい。
- 文化センターのあり方としての方向性は、音楽ホールとして持っている特性を十分生かす。しかし、音楽以外にも文化センターの使い方は、いろいろとほかにも使えそうな気もする。
- この会議は、文化センターに関する注文を決めるわけではないが、区長には今後ともいろいろと考えていただきたい、と意見を申し上げることはできるだろう。
- すぐに全部を実現できるとは考えていないが、これまでの意見は本当に芸術の振興に大きな意味を持っているし、重要だということを、具体的な提案として申し上げたらよい。
- 現在、都内のオーケストラでは、新日本フィルハーモニー交響楽団が「すみだトリフォニーホール」、東京フィルハーモニー交響楽団が「BUNKAMURA」、NHK交響楽団が「NHKホール」、日本フィルハーモニー交響楽団が「杉並公会堂」、東京交響楽団が「ミューザ川崎」にフランチャイズを持っている。
- 今後、読売日本交響楽団が「東京芸術劇場」と事業提携すると聞いている。また、東京シティ・

フィルハーモニック管弦楽団は江東区とフランチャイズ契約を結んでいる。ただし、江東区の場合はフランチャイズと言わず、芸術提携として取り組んでいるようである。

- これまでの議論でもフランチャイズという言葉が、ひとり歩きして、重いものになっているが、都内のオーケストラの状況をみると、文化センターを100日以上使って、そこを本拠地として腰を据えて活動しようというところは、見当たらないような気がする。
- まずは事業提携や教育提携等のソフト面での連携を発信していったほうが、各オーケストラが参加しやすいように思う。
- いろいろな形態で事業提携してそれぞれが活動しやすくすることとは、もちろん考える必要がある。特に文化センターの場合には、その連携をどのように生かしていくかを考えていけばよい。
- 事業提携のような形態だと、たとえば複数の違う音楽関係の団体と、連携することができるので、そういう発想もできるのかと思った。
- クラシックの団体、ジャズの団体、ポップスはそういう団体があるかどうか分からないが、複数の音楽団体との連携を含めて、何かひとつ多様なものを打ち出すことはあり得るだろう。
- これまでに、美術との関係では、国立新美術館でのロビーコンサートの話が紹介された。大原美術館のギャラリーコンサートのみならず、特に新しい美術に関しては、パフォーマンス活動も含んだ展覧会が開催している。そういう取り組みも文化センターとして可能性があるのか。
- 音楽と絵画というのは親和性があるように思う。
- 損保ジャパン東郷青児美術館では、美術館がある高層階のフロアでの演奏はできないが、ビル1階のロビーでは、美術館の展示に合わせたイメージの音楽ができないかという話が管弦楽団から寄せられている。
- 美術と音楽のセットは、美術館利用者からすると、音楽がおまけでついてくる。演奏する方からすると練習の成果を観覧者に披露して、それなりの評価を得られる。
- こうした発想は、ある意味、一般人のアイデアだと思う。文化センターについても、全然専門でない人間が意見するのも、時には新しい視点が出るかもしれない。
- しかしながら、マネジメントやコーディネーターなどについては、プロフェッショナルな人に、一定量のイメージを持ってもらって、有料でアイデアを出してもらうことも考えてみてはどうか。
- アイデアを提供することによって対価を得ている専門家に相談して考えてもらうことも一考ではないか。

4 次回日程等について

- (1) 第3回目の会議は、5月頃開催予定とし、日程や会場等については、別途事務局から連絡することとした。また、専門部会は、部会員と相談のうえ、1月頃開催予定とするとした。
- (2) 各委員が新宿文化センターの現場視察を行うために、日程調整のうえ事務局から連絡することとした。
- (3) 高階秀爾会長が24年11月に文化勲章を受章したことが事務局から紹介された。また、同年12月の新宿区議会第4回定例会で、新宿区名誉区民に選定されたことが事務局から報告された。

5 閉会

会長のあいさつをもって、午後3時に閉会した。